

ZENBI

全国美術館会議機関誌

August 2012 [Vol.2]

ブロック報告

- [北海道] 北海道の美術館文化 岩崎直人 ● 3
- [東北] 被災地から―震災復興支援展あれこれ 三上満良 ● 5
- [関東] 第二世代美術館の行方、など 前山裕司 ● 7
- [東京] 東京：震災の余波は続く 近藤健一 ● 9
- [北信越] 目の前を行き来する潜在的鑑賞者たち 二木伸一郎 ● 11
- [東海] コレクション展に見る時代の気分 川谷承子 ● 13
- [近畿] 関西の美術館の連携について 島 敦彦 ● 15
- [中国] 知恵を絞って 柳沢秀行 ● 17
- [四国] 四国四県の美術館動向 松本教仁 ● 19
- [九州] 美術館の原点へ／拡張する美術館へ―九州の活動から― 坂本顕子 ● 21

新規会員館紹介

- 一関市博物館 ● 23
- 新潟市新津美術館 ● 24
- 海に見える杜美術館 ● 25

事務局から 26

ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定 27

編集後記 28

ZENBIフォーラム

- 01 博物館法検討委員会中間報告「美術館基準(案)」の顛末 酒井香朗 F-02
- 02 「博物館倫理規程に関する調査研究報告書」についての報告 安田篤生 F-04
- 03 「東日本大震災発生から、一年を振り返る」 山内宏泰 F-07
- 04 陸前高田市立広田中学校で被災した4点の作品 田中善明 F-10
- 05 ブロック展を終えて 大島徹也 F-12
- 06 「的世界」で考えたこと 成相 肇 F-15
- 07 「地方」の光と影 平井章一 F-17
- 08 個人美術館としての活動の広がり 岡部 卓 F-20

ZENBI 全国美術館会議機関誌 Vol.2 2012年8月1日発行 ©全国美術館会議

[編集] 全国美術館会議機関誌部会 編集幹事 尾崎信一郎 松山利光

[発行者] 全国美術館会議 〒110-0007 東京都台東区上野公園7-7 国立西洋美術館内 TEL 03-3828-0290

[デザイン] 宮谷一款 (株式会社エヌ・シー・ピー) [印刷] 日本写真印刷株式会社 〒604-8551 京都市中京区壬生花井3



美術館の名称や「当番館」といった表現が歴史を感じさせます。
ZENBI では全国美術館会議の歴史を記録する過去の貴重な資料や写真を探しています。お心当たりの方は編集部まで御一報下さい。

北海道の美術館文化

岩崎直人（札幌芸術の森美術館）



報告すべき事は数多あるが、際だつ事項を3点に絞ってお伝えする。

一つ目は雪による夕張市美術館の屋根崩落である。この冬、他の都府県においても寒さの厳しい冬を過ごされたと聞かすが、北海道も例外ではなく、いつになく気温が低かった。統計によると、札幌は真冬日（最高気温零度未満）を60日も数え、この30年間では3番目に寒い冬であったという。降雪量については、札幌は例年に比べると少なかったのだが、北東に40キロ離れた岩見沢では降雪・積雪量ともに観測史上最高を記録した。同じ北海道でも雪に関しては地域による差の激しいシーズンであった。さて、事故のあった夕張市美術館は、その記録的大雪に見舞われた岩見沢にほど近いところに位置する。美術館の屋根に積もった雪は約2メートルの高さにまで達していたという。翌日にはその除雪が行われる予定であったが、一足遅かった。幸い、深夜から未明のできごとだったので、けが人などの犠牲者はなかった。また、作品の方とはいうと、冬季の長期休館の時期であったため、地下の収蔵庫にほとんど移されており、やはり被害はなかったという。夕張ゆかりの作家はもちろん、珍しいところでは澤田政廣による炭坑にまつわる木彫作品、《南無石炭釈迦牟尼仏》などをコレクションしており、それら貴重な文化財が無事であったことはなによりであったとほっと胸をなで下ろす。作品たちは市内の公共施設に避難、保管されたという。美術館は、残念ながら現在も閉館を余儀なくされている状態

にある。周知のように財政面でも痛手を負っている街なだけに、その復旧には時間がかかるかもしれない。しかし、早くに復活を遂げ、人々の疲弊した精神を和らげ、安定した心持ちを与えてくれることを望む声も確実にある。

二つ目は、北海道の美術館学芸員によって構成される組織「北海道美術館学芸員研究協議会」が20周年を迎えたことである。「道美学芸研」と通称される当会は、発足当初、10館・32名の加盟館・会員であったが、現在は39機関（内、美術館は31館）・75名を数える大規模な会となった。学芸員の調査・研究活動の促進とその環境整備、発表機会の充実というのがその設立の趣意で、例年、3月に北海道立近代美術館を会場に全会員が集結し、総会と研究協議会を2日間に渡って行っている。毎回テーマを設定し、会員による研修・研究発表報告のほか、外部講師を招いての講演も行ってきた。また、会報も発行し、発表の抄録を掲載している。なお、最新の21号からは査読付論文の掲載を開始し、会報に研究的要素を付加してさらなる充実を図っている。その第4号（1992年）で、当時会長の奥岡茂雄氏は、「研究活動の限界が美術館の限界という。北海道のために、美術館のために、そしてそれぞれの学芸員の自己実現のために、この会の充実、発展を心から願うものである」と研究の高まりが美術館の存在意義を高め、ひいては地域文化の向上へと結びつくということを示唆してくれている。成人になったばかりの当会の意義はこれから

ますます重要なものとなっていく。

最後に、札幌芸術の森美術館における教育普及事業の一環として打ち出した「子どもの美術体験事業 ハロー!ミュージアム」が5年目を迎え、本格化してきたことである。札幌市内には現在208校の市立小学校がある。その5年生を対象に美術館に招き、美術鑑賞の楽しさを味わってもらおうというのが趣旨である。最初の2008年度は14校、次いで29、82、160校と受け入れ校数を増やし、ついに本年度は182校に到達する。その内容はとても充実しており、まず、事前学習と称して、美術館スタッフが各学校に赴き、鑑賞のヒントと美術館におけるマナーの授業を行う。これを踏まえて、子どもたちに実際に美術館に足を運んでもらい、いよいよ展覧会を鑑賞することとなるが、その際にも、各クラス、大規模校の場合はさらに各班に分かれてそれぞれにスタッフが付き、およそ10分間、鑑賞の練習を行う。そして各自、自由鑑賞へと至る。その際、目で見えて気がついたこと、心で感じたことを文章で書き取り、さらに興味深く思われる作品を絵に描いてもらうという内容となっており、きわめて充

実した鑑賞教育プログラムとなっている。全校という目標が現実に見えてきた今、当館スタッフだけではとても手に負えないため、そのためのボランティアスタッフも整え、万全を期している。なお、美術館における展覧会鑑賞コース以外にも、74点の彫刻を常設展示する「野外美術館」を主とした屋外型鑑賞コースと佐藤忠良記念子どもアトリエにおける鑑賞プラス創作（粘土製作）のコース、そして今年度から本郷新記念札幌彫刻美術館（同じ札幌市芸術文化財団で運営）における鑑賞コースを設け、学校の多様なニーズに沿えるよう対応している。創造都市を標榜する札幌の、文化熱向上の一助となる重要な事業である。

以上、三つの出来事は、いずれも美術館の存在価値や意義を再確認させてくれたり、より堅固なものへと発展していることを気づかせてくれる出来事だ。人々の生活にさらなる潤いを与える一助となり得よう、ひいては地域文化の成熟に寄与できるよう、北海道における美術館文化なるものの発展を図っていこう。



「子どもの美術体験事業 ハロー!ミュージアム」会場風景

被災地から——震災復興支援展あれこれ

三上満良（宮城県美術館）



東日本大震災の発生直後より、多くの方々から被災地のミュージアムを支援したいという申し出をいただいていた。あの日から1年が経過し、いま東北の美術館や博物館では、こうした篤志によって実現した「復興支援展」が行われている。

支援する側の知名度によってメディアをにぎわせ、地域の話題となっているのが「ルーヴル美術館からのメッセージ—出会い」展である。岩手、宮城、福島県の立美術館は、2011年の7月に、ルーヴルから同館の所蔵品を3館で巡回展示するプロジェクトの提案を受けた。「被災者の皆様に向けて連帯の気持ちを伝えたい」（アンリ・ロワレット館長）というメッセージとともに、古代エジプトから18世紀絵画まで、「出会い」をキーワードとして選定された美術品23点が、盛岡、仙台、福島の3都市を巡回中（4月27日～9月17日）である。

筆者が勤務する宮城県美術館で開催の「丸沼芸術の森所蔵 アンドリュー・ワイエス展」（5月26日～7月22日）も、作品の所蔵先からの全面的な支援を受けて開催に至ったものである。もともと、昨年の4～5月に予定していた特別展だったが、県下の被害が甚大で、当館の施設も被災したために、やむなく中止した経緯がある。震災の1か月後に、丸沼芸術の森の須崎勝茂代表から、文化活動を通して復興に協力したいという申し出があり、作品の無償貸与だけでなく、輸送費や作品保険料などの経費までも貸出側にご負担いただいて、今年度に再開することになった。丸沼芸術の森が行う

震災復興支援展は、来年3月に茨城県近代美術館でも開催の予定という。

旧聞に属するが、仙台市博物館では、MOA美術館の支援による「特別公開 国宝紅白梅図屏風とMOA美術館の名品」（3月6日～25日）が開催された。これまで館外で公開されることのなかった尾形光琳の《紅白梅図屏風》（津軽家伝来）をはじめ、東北地方にゆかりの美術品を含む国宝、重要文化財が貸し出され、連日多くの観覧者を集めた。

今後に予定されている復興支援展としては、ジョー・D・プライス氏のコレクション展「若冲が来てくれました—プライスコレクション・江戸絵画の美と生命」がある。プライス氏も、辻惟雄氏を通じて早くから支援の意志を表明され、伊藤若冲の《鳥獣花木図屏風》などの作品が仙台市博物館、岩手県立美術館、福島県立美術館に無償で貸し出されることになっている（2013年3月～9月）。

こうした美談に隠れてしまいがちだが、完全終息していない原発事故と放射能汚染は、当地での特別展開催にとって、いまなお大きな障害となっているのも事実だ。日本国内の4館を巡回する「ベン・シャーン—クロスメディア・アーティスト」展に作品を貸し出したアメリカの複数の美術館は、福島県立美術館での展示を許諾しなかった。また、前述したルーヴル展の開催に際しても、フランスでは、日本への作品貸出に反対する動きがあったと新聞で報じられている。

この1年、放射線量の数値に敏感になって生活してきたので、美術品を貸出す側の危惧がわからないわけではない。だからこそ、ときおり発生する大小の余震や、放射能汚染の現実を前にして、それでも、被災地の人々に美術作品を届け、再起するための心の糧としてほしいという支援者の心遣いには、頭が下がる。

東北エリア内において、被害の少なかった美術館が、大きな被害を受けた館を支援する展示についても記しておこう。

青森県立美術館が開催した「東日本大震災復興支援特別企画・気仙沼／リアス・アーク美術館／N.E.blood 21：坂本英子」（2月18日～3月11日）は、いまなお休館中（7月28日に部分的に再開）のリアス・アーク美術館が継続してきた東北・北海道在住の若手作家の個展シリーズ「N.E.blood」を紹介し、21回展として予定されていた坂本英子（青森県八戸市在住）の展示を、いわば肩代わりした企画である。このような地域内支援のかたちもあるのかと感心した。

いま宮城県美術館が計画しているのは、津波で被災した石巻文化センターの所蔵品の一時保管を兼ねた展示である。被害の概要は、文化財レスキュー活動の報告でご存知と思うが、未だ施設が再建される目途がたっておらず、傷んだ作品の修復が終わっても行き場がない状態である。仮収蔵庫を建設する計画があるものの、高台の平地には仮設住宅が建てられ、条件に見合った敷地が無いのだという。救出した所蔵品は当分の間、現在の避難場所に留め置かざるをえず、美術品に関しては、当館で保管することになった。

しかし、当館の収蔵庫の容積も限られている。ならばと考えたのが“展示”である。地域内でも知られているとはいえない石巻の近現代木彫コレクションの紹介と、併せて被災と文化財レスキュー活動の報告も兼ねた小企画展を、本年9月から予定している。遠くない将来に再建されるであろう新たなミュージアムにおいて、美術部門の存在を示すための応援になればと思う。支援される側から支援する側に回る余裕ができてきた昨今である。

(2012.7.10 記)



東北3都市巡回展「ルーヴル美術館からのメッセージ—出会い」（岩手県立美術館にて）

第二世代美術館の行方、など

前山裕司（埼玉県立近代美術館）



私が勤務する埼玉県立近代美術館は、今年開館 30 周年となる。関東ブロックの時評として、自らの館の話題から始めるのは忍びないのだが、これはひとつの美術館が迎えたただの周年にとどまらない、別の意味をもつと考えているので、しばしお付き合い願いたい。

まず、当館と同じ 1982 年に開館した美術館を、改めて数え直してみると 10 館ある。以下、煩雑だが羅列すると、1 月の MOA 美術館、7 月の北海道立旭川美術館、9 月の三重県立美術館、10 月の久米美術館、笠岡市立竹喬美術館、11 月は同じ 3 日に開館した 3 館、岐阜県美術館と埼玉県立近代美術館、神戸市立博物館のほか、大阪市立東洋陶磁美術館、村内美術館となる。翌 83 年の開館も同じく 10 館あり、82、83 年はまさに「美術館ブーム」であった。

美術館ブームに開館した美術館が迎えた 30 年。それは今年 60 周年を迎える東京国立近代美術館やブリヂストン美術館のわずか半分でしかない。50 年代に開館した草創期の、いわば第一世代ともいえる美術館が、「美術館」という存在を根付かせるには、おそらく開拓者的な闘いがあった、と想像する。だが、美術館ブームの第二世代（磯崎新の分類とは異なる意味で用いている）の美術館も、まったく違った形ではあるが、闘いを強いられてきた。公立のことしかわからないのだが、それは「行政の無理解」などという単純な相手ではなく、曖昧模糊とした手応えのない空気のようなものを相手に、

消耗戦を続けてきたような思いがある。この時代を経験した学芸員の誰もが、おそらく愚にもつかない、今では笑い話になるような思い出を持っていることだろう。

伊勢神宮の式年遷宮が 20 年ごとなのは、職人の技術の伝承が可能な年から定められているという説を聞いたことがある。なにも伊勢神宮を持ち出すまでもなく、10 年一昔、30 年といえば一世代である。30 周年が 10 年や 20 年と違うのは、美術館ブームの開館の頃から携わっていた古株の学芸員が、これから次々に定年退職していく、世代交代の時期にあたるということだ。

第二世代の美術館の多くで、退職する学芸員の知識や記憶をどのように継承するのか、すでに話題となっていることと思う。愚にもつかない、と上に書いたような話をはたして伝承する意味があるかどうかわからないが、闘ってきた時代や状況を伝えることは無意味ではないはずだ。若手学芸員に嫌がられながら、メールもパソコンもファックスもなかったんだ、と昔話を繰り返す老学芸員に私はなりたい。

この世代の美術館の抱える悩みは、おおむね以下のように要約できる。なにより予算が乏しく、それをカバーするため仕事が増え、人数が減っても事業は減らず、施設は老朽化し、ブロック・パスター展を横目に見ながら集客を求められ、地道な活動に精を出そうとするが、その時間も足りない。それらの問題はじわじわと基盤を蝕み、根源的な危機

となりつつある。

こんな美術館から見るとうやましい話は、開館 15 (!) 周年の宇都宮美術館で、改修工事にともなって収蔵庫増設が行われたことである。中 2 階を含めると 450㎡の増設ということで、大型の収蔵庫がもう一部屋増えた計算になる。あわせて、同館の 15 周年記念展（兵庫県立美術館の開館 10 周年でもある）「カミュー・ピサロと印象派」における国家補償制度の申請では、膨大な書類作成が必要だったと伝え聞か、その果敢な挑戦にも拍手を送りたいと思う。

一方、今年度中にも開館と言われていた前橋市の美術館だが、新市長の方針で白紙となり、学芸員の採用試験も中止となった。最近の新聞報道によると、商業施設から改装する建築工事費 8 億 4,000 万円を約 1,400 万円減額したが、工事は予定通り進められているという。だが、運営に関しては新たに設置された「運営検討委員会」によって再検討されるらしく、「箱作りより人作り」を主張する市長が、美術館機能をもたない施設への転換

を主張していたことからすると先行きはまだ不透明である。

その是非について論じるつもりはないが、ここで「箱もの」と断罪されている美術館像に重なるのは、第二世代美術館の姿と考えるべきだろう。「箱作りより人作り」という趨勢は、美術館にとって敵対することではないが、存在意義を揺るがす大きな波としてとらえれば、ここにも第二世代美術館のひとつの危機があるといえる。

最後に、東日本大震災による津波で流出した茨城県の五浦「六角堂」の復元を挙げておきたい。茨城大学五浦美術文化研究所と多くの関係者・支援者の苦労と熱意を、HP や報道で垣間見ただけの傍観者にすぎないが、関東ブロックの重要なトピックとして記しておきたい。とくに、有形登録文化財としての再建を断念せざるをえない状況で、明治 38 年創建当時の姿での復元という、困難が予想される高い目標を掲げ、完成させたことは特筆すべきことだろう。



宇都宮美術館に新設された収蔵庫

東京：震災の余波は続く

近藤健一（森美術館）



2011 年度上半期に続き、下半期も東京地区の美術界では東日本大震災や原発事故の影響が様々な形で見られた。畠山直哉の個展「Natural Stories ナチュラル・ストーリーズ」（東京都写真美術館、10 月 1 日～12 月 4 日）では、震災により出品作が急遽変更になり、作家の出身地、陸前高田市の風景を収めた作品も展示された。「TWS クリエーター・イン・レジデンス・オープン・スタジオ トーキョー・ストーリー 2011」（トーキョーワンダーサイト渋谷、3 月 10 日～4 月 29 日）では、米田知子が震災を契機に日本社会を再考する新作を発表。82 年生まれの新人、竹内公太は「公然の秘密」展（XYZ collective (SNOW Contemporary)、3 月 17 日～4 月 1 日）で、ネット上の「ふくいちライブカメラ」で配信された、福島第一原子力発電所での「指差しパフォーマンス」についての作品を発表した。

語弊がある言い方だが、震災後、最も活躍が目につくのは、Chim ↑ Pom であろう。個展「SURVIVAL DANCE」（無人島プロダクション、9 月 24 日～10 月 15 日）では、岡本太郎《明日の神話》に福島原発を想起させる絵を付け足し軽犯罪法違反でメンバーが書類送検されたことに端を発する新作や、放射能汚染に言及する作品などを発表した。美容室の中にあるオルタナスペースでは「K-I-S-S-I-N-G」（The Container、9 月 26 日～12 月 19 日）と題する新作を発表。2 つの電球をモチーフに、愛情や同情を求める人間の寂

しや不安に焦点を当てた。「LEVEL 7 feat. 広島!!!!」（原爆の図 丸木美術館、12 月 10 日～12 月 18 日）では、《ヒロシマの空をピカッとさせる》（2009 年）から上記展覧会での出品作まで、核や放射能と日本の関係をテーマにした作品の集大成的展示を行った。さらに 2012 年度の開催ではあるが、「ひっくりかえる 展」（ワタリウム美術館、2012 年 4 月 1 日～7 月 8 日）ではキュレーションも担当し、アクティヴィズム的な活動を行う JR やヴォイナなどを紹介した。元々、Chim ↑ Pom は瞬発力と行動力に長けているが、展覧会という「時差」があるメディアを用いながらの問題提起の素早さには脱帽である。

ところで、2011 年度は震災の影響で大型展のいくつかが延期・中止を余儀なくされたが、7 月開催予定だった「野田裕示 絵画のかたち／絵画の姿」展（国立新美術館、1 月 18 日～4 月 2 日）は、震災による節電の影響で半年遅れての開幕となった。今回で 3 回目を迎えた、一週限定のアートの祭典「六本木アートナイト」（六本木地区の美術館や商店、公共スペース等、3 月 24 日～25 日）も、一年延期の後に無事に開催。内容を一部変更し、震災に言及する作品、パフォーマンスやトークプログラムが加えられた。公式来場者数延べ 70 万人と盛況に終わった。

また、その他の傾向としては、大型展では個展が多かったように思う。東京都現代美術館で同時開催された鬚嘔と田中敦子の個展（2 月 4 日～5 月

6 日）、松井冬子（横浜美術館、12 月 17 日～3 月 18 日）、イ・ブル（森美術館、2 月 4 日～5 月 27 日）や杉本博司（原美術館、3 月 31 日～7 月 1 日）などの個展が代表例である。中でも、最も注目されたのが「生誕 100 年 ジャクソン・ポロック展」（東京国立近代美術館、2 月 10 日～5 月 6 日）である。日本初の大規模なポロック展である本展は、初期から晩年までの約 70 点を国内外から集めて展示。出品作の一つ、テヘラン現代美術館所蔵《インディアンレッドの地の壁画》（1950 年）に言及する「評価額 200 億」というキャッチ・コピーには驚かされた。作家のアトリエ再現という、最近の大型展で定着しつつあるファン・サービスのコーナーもあった。

対照的に、いわゆるテーマ展は、大規模なものはほとんど開催されなかった。その中で、話題を集めたのは「ぬぐ絵画—日本のヌード 1880-1945」（東京国立近代美術館、11 月 15 日～1 月 15 日）であろう。美術の輸入とともに始まった、日本での裸婦画の歩みを約 100 作品で追ったものである。また、一義的にはテーマ展ではないかもしれないが、

「第 4 回恵比寿映像祭」（東京都写真美術館、2 月 10 日～2 月 26 日）は、映像を成立させる物質性（フィジカルティ）を考察するものであったが、一見矛盾するこのテーマ設定は興味深かった。また、今回に限らずこの映像祭は、単調になりがちな映像展を最後まで飽きさせないように会場構成の工夫がされている。

予算や人員の削減と、入場者数へのプレッシャーの増大というのは、日本の多くの美術館が抱える問題であり、コストと手間がかかる割に安定した入場者数を見込めない現代美術のテーマ展がどんどん減っていくのは仕方がないことかもしれない。しかし、キュレーションを読み解くスリルを味わう機会が少なくなるのは、寂しいものである。その一方で、ビエンナーレやトリエンナーレが、祝祭性や総花的であることを意識しつつも、緩やかなテーマ性を持って企画されるケースが増えているように感じられる。今後、キュレーションの変化球が試される場が、このような芸術祭的な企画に移行していくのかどうか見守っていきたい。



2011 年 8 月 28 日、「ふくいちライブカメラ」に向かって指差しする作業員
Courtesy of SNOW Contemporary



Chim ↑ Pom 《Invisible Wall》2011 ©Chim ↑ Pom
Courtesy of MUJIN-TO Production, Tokyo

目の前を行き来する潜在的鑑賞者たち

二木伸一郎（石川県立美術館）



毎年5月中旬になると、春の企画展の入りがかかる。当館の場合、古美術、近現代美術、近現代工芸と三つのジャンルが、ほぼローテーションで春、秋、冬を担当する。春が良ければあやかりたいし、そうでなければ、次はと意を強くする。今年の「中国陶磁名品展—イセコレクションの至宝—」は幸先の良い出だしであった。昨年企画した「セルフ・ポートレート展—キャンパスの中の巨匠たち—」が、いささか残念な結果であっただけに、うらやましい限りである。東日本大震災と原発事故の影響によってお隣の兼六園や金沢21世紀美術館の入館者も減じていたのであるから、当館の場合も推して知るべしであった。そう思いつつ、昨年同期との入館者数の比較を行うと、いろいろと学ぶことが多い。

2010年度の入館者数は427,822人、2011年度は390,711人、今年は5月末で8万弱、このまま推移すれば、2010年度を超えるであろう。この数字を見て結構健闘しているのではないかと思われるかもしれないが、あくまでもこれは美術館に入った人の数であり、展覧会入場者とは違う。2007年9月から2008年9月までの1年間、当館は大規模改修を行った。その際に、自動カウンターをエントランス正面入り口、裏手入り口など3カ所に設けた。5分おきに記録が集計パソコンに送られてくるが、総カウントの97パーセントは正面入り口からの入館者で占められる。

2011年の正月三が日と今年の三が日を比較する

と、前者は4,691人、後者は5,976人と圧倒的に今年が多い。リニューアルに際し、エントランスホール奥にスイーツで著名なカフェを設けることとなり、もともと月曜休館ではなく（旧館時代の1975年度から）、展示替えと年末年始が休館日であった当館は、館としては年中無休となった。展示棟は三が日の間巨大なシャッターで閉まっているのだが、その間にゴールデンウィーク中と変わらぬ人でエントランスは賑わっているのである。今年の1月1日などは2,285カウントであった。北陸のことゆえ入館者数は雪に大きく左右する。2008年度などは三が日雪が降ったため今年の半分位の数である。昨年は東日本大震災前であり、雪は降ったが、正月は比較的穏やかであった。

ではゴールデンウィーク中はどうであったろう。土日祝日が入り交じり、いつからいつまでの統計をとるか難しいところであるが、4月28日から5月8日までを比較すると、昨年は14,320人、今年は17,002人。だが、カフェのお客は昨年が多い。つまりは展覧会の人気度が大きく違っていたということである。さて、カウント数と展覧会入館者数の乖離はどのくらいであろうかと日々の数字を見ていくと、当館の企画展であればカウント数全体の2割から3割、無料や招待券の多い新聞社主催の展覧会であれば4割台というところである。中にはほぼ同数や上回る場合もある。

自動カウンターは同一人を区別することはない。従って同じ人間が玄関を出入りすれば、当然カウ

ントされるが、当館のエントランス構造であれば、そう同じ人間が目的もなく出入りを繰り返すことは考えられないし、また状況を見ているそのような状態にはない。つまり、当館の企画展の場合、7割ほどの入館者が、展覧会以外の目的で来館していることになる。エントランス中央左にミュージアム・ショップがあるとはいえ、大半はカフェがお目当てということは、入り口から脇目もふらず奥のカフェに歩む人々の姿を見ればわかる。この入館者の何割かを、企画やコレクション展示室へ足を向けさせることができれば、観覧者数は飛躍的にアップするのである。だが、この潜在的観覧者はなかなか手強い。掲示物をエントランスに出しても、それは一切目に入らぬようで、一直線にカフェに吸い込まれていく。

下図の右前とその奥に写っているのは、インフォメーションボード（電子掲示板）である。50インチのハイビジョンモニターと薄型のコンピュータで構成され、縦型が3台、横型が4台を現在配備している。サーバーとLANで繋がっており、それぞ

れのモニターに同じデータを流すことも別々のデータを流すこともできる。むしろ縦型と横型であるから、2種類のデータは少なくとも作る必要はある。いわばM社に代表されるプレゼンテーションソフトのスライドショーと考えればいい。音声も出るし、画像に動きを付けることも、動画も組み込むことができ、なんとか、よどみない足を止めることができなかと苦心しているところであるが、なかなか難しい。

足を止めるには、マスコミに取り上げられ来館者の脳裏に前もってインプットされていることが前提なのであろうか。その点、金沢21世紀美術館のマスコミ対応には敬服する。「工芸派未来展」（4月28日～8月31日）という「金沢21世紀美術館」ならではの企画展は全国紙、地方紙に大きく取り上げられ、さらにイベント毎に、そして評論家の寄稿が繰り返し紙面を賑わしている。記者との親密な関係、徹底した広報、入館者150万は伊達ではないと思う次第である。



石川県立美術館 エントランスホール
正面奥 ル・ミューゼ・ドゥ・アッシュ KANAZAWA

コレクション展に見る時代の気分

川谷承子（静岡県立美術館）



東海地方のこの春の展覧会ラインナップを見ると、美術館のコレクションを活用した企画展が目につく。各地でコレクション展が花開いている背景には、館ごとの個別の理由があるだろうが、多くの公立美術館は、厳しい自治体予算を反映して展覧会事業費が少しずつ目減りしているなか、館内を見渡すと、開館20年以上が経ち、購入や寄贈により収蔵されたコレクションが充実しながらも多くが何年も活用される機会に恵まれずに眠っている。お金をかけずに、これら収蔵品を活用しない手はない、という背景が、どこの公立美術館にもあてはまる事情としてあるのではなかろうか。

静岡県立美術館では今年度、コレクションを活用した企画展を3本行う予定だ。春に筆者が担当した「カラーリミックスー若冲も現代アートもー」（4月14日～5月27日）は、収蔵品を分類している時代や地域の枠を取り払い、色という視点から再編集し、美術史を横断する組み合わせで作品の新鮮な味わい方を提案する、というコンセプトで組み立てた企画展であった。伊藤若冲《樹花鳥獣図屏風》や草間彌生《水上の蜚》など、人気の高い館蔵品に、寄託の日本画、写真、現代作品を織り交ぜて構成した。「色」という普遍的なテーマで、どこまでユニークな展覧会に仕立て上げられるかが課題としてあった。2000年に開館したテート・モダンが、美術史を横断する4つのテーマから常設展を組み立てる試みを行っていることや、2005年にポンピドゥー・センターで開かれた「ビッグバン

ー20世紀アートにおける破壊と創造」展で膨大なコレクションをテーマごとに分類しなおした手法が、展覧会を組み立てる際のイメージとして念頭にあったことは確かだ。「カラーリミックス」展は、深いコンセプトで固めた展覧会ではなかったが、それゆえ鑑賞者が想像力を巡らせる自由さを生んでいた。現在のまなざしと関心から収蔵品の力を引きだし、鑑賞者との出会いを提供する場としてそれなりに機能していたのではないだろうか。

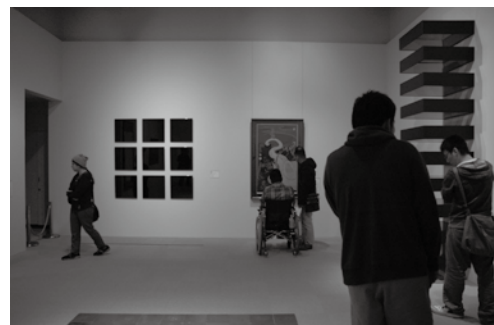
開館30周年を迎えた岐阜県美術館では、「リニューアルオープン記念 初公開作品を含む県美コレクションの精髓による三幕の物語」と題し、1月から5月までの5カ月にわたり、シリーズで3本のコレクション展が開かれた。この春は、最終幕の「ルドン氏が見た夢」（4月5日～5月13日）が開催された。約4,000点ある収蔵品の中から、自館のコレクションの中核をなすテーマで構成された、正統派の収蔵品企画展であった。

愛知県美術館では、愛知芸術文化センター開館20周年を記念する「魔術／美術—幻視の技術と内なる異界」（4月13日～6月24日、以下「魔術／美術」と略）が開催された。この展覧会は、愛知、岐阜、三重の東海地方の三県立美術館のコレクションを活用する目的で2004年からはじまった協同企画展の第6回目となる。今回は「魔術」と「美術」の混じり合う場、というコンセプトに沿って、三館のコレクションの中から時代や地域を横断する作品が選ばれ構成されていた。確かに、合

理的な思考を逸脱するものとしての「魔術」と「美術」とは、もともとその成り立ちからは近い領域にあるが、「魔術」という視点は、美術館という近代的な知の装置からは最も縁遠いものであった。同様に、科学技術が発達した現代を生きる我々には馴染みがないものである。だからこそ、現代人の好奇心や想像力を喚起する可能性を秘めた領域ともいえ、面白い着眼点ではある。タイトルの「魔術」という言葉から、1989年にポンピドゥー・センターで開催された「大地の魔術師たち」展を思い起こすのは、筆者に限らないと思うが、愛知県美の木村定三コレクションの中から、世界各地の呪術や儀礼にまつわる考古遺物を選び、近現代の作品と同等に並べたところなどは、同展の手法を幾分参考にしたことをうかがわせる。しかし西洋と日本に限定される地域の近現代作品を中心とする「魔術／美術」の構成は、文化多元主義の視点から、モダニズムの先鋭のアーティストの表現と第三世界

の作品を等価に並べて展示した「大地の魔術師たち」展とはそもそもの成り立ちが異なる。「魔術／美術」は、西洋と日本のおもに近現代美術に通底する魔術の要素を、重層的なまなざしを交差させ、すくい上げようとした試みであったといえる。

70年代後半から80年代にかけて建てられた日本の公立美術館は、建設後30年近くが経ち、どこも財政難や組織の膠着化、2003年以降の指定管理者制度の導入などを背景に迷走しているように見える。「魔術／美術」の図録で愛知県美術館の中村史子氏が述べているように、並行してここ数十年で西洋近代社会を支えてきたパラダイムの解体が進み、日本に限らず欧米も含め美術館制度そのものが再考を迫られ、美術館の現場においても、日々多くの反省と議論が行われている。今、地方の公立美術館で手探りで行われている収蔵品企画展の試みには、こうした「美術館の転換期」の気分が色濃く反映されているように思う。



静岡県立美術館「カラーリミックスー若冲も現代アートもー」会場風景



愛知県美術館「魔術／美術—幻視の技術と内なる異界」展入口風景

関西の美術館の連携について

島 敦彦（国立国際美術館）



国立国際美術館は今年、開館 35 周年の節目を迎えた。万博記念公園から大阪の都心部、中之島に新築・移転して、8 年目になる。国内外の現代美術を紹介することを旨に、さまざまな展覧会の開催と同時に作品の収集を長年にわたり行ってきたわけだが、引っ越し前は、どちらかと言えば、見に来たい人だけがわざわざ訪ねて来てくれる美術館として、企画者側もなかば超然と、なかば陶然と、独自に活動していればよかった。

しかし、中之島に移ってからはアクセスが格段によくなり、ふらりと立ち寄ってくださる観客やそれまで足を運ぶきっかけのなかった不特定多数の人々が増え、かつてない賑わいを見せるようになった。たとえば、一般の方には近づきたい硬質の現代美術展（「もの派再考」展など）であっても、万博時代に比べ来場者が約 3 倍に増え、先頃開催した「草間彌生 永遠の永遠の永遠」にいたっては、当初の予想をはるかに超えるおよそ 22 万人の入場者であふれかえった。他の現代美術の作家に比べ認知度の高い草間彌生ではあったが、これほどの反響を生み出したのも、中之島という場所の特性が大きく作用したに違いない。

そんなわけで、万博時代にはあまり考慮してこなかった、広報面や館内サービスについて一層の充実が求められ、展覧会の内容も今まで以上に創意工夫を迫られるようになった。一方、展覧会に数多くの来場者があるにもかかわらず、国立国際美術館にコレクションがあるということに実は観客の

多くが気付いていないことに愕然としたことがある。常設展に並ぶパブロ・ピカソの作品を「これは本物ですか？」と看視員に尋ねる人が続出したのである。大阪の美術館にピカソの実物があると想像できなかったようなのである。

国立国際美術館のコレクションを何としても知ってほしい。しかし、当館の常設展だけではなかなか入場者が見込めないし、広報にも限界がある。そこで思いついたのが、当館と隣接して建設が進められている（橋下市長就任後の進捗状況は把握できていない）大阪市立近代美術館建設準備室のすばらしいコレクションと当館のコレクションとを合体させて、コレクションのみによって企画展を立ち上げることだった。幸い、大阪市立近代美術館建設準備室の協力を得られ、さらに当時まだ美術館活動をしていたサントリーミュージアム [天保山] が加わり、国公立 3 館の特色あるコレクションを相互に生かし、「大阪コレクションズ」と銘打って、各館が相互にコレクションを貸与しあい、コレクションによる企画展を開催することとなった。2007 年のことである。

国立国際美術館では、セザンヌ、ピカソ、モディリアーニからジグマー・ポルケやトニー・クラッグにいたる欧米の 20 世紀美術を、大阪市立近代美術館準備室では佐伯祐三とパリの同時代の美術家たちの作品を、サントリーミュージアム [天保山] では 20 世紀のモダン・デザインをテーマに、それぞれ共同で図録（全 3 冊）を作成し、広報活動も

相互に行って、組織の違いを乗り越えて 3 館のコレクションの魅力を伝えることができた。万博時代には考えもしなかった発想だったが、お互いのコレクションへの理解も深まった。

その後、昨年の秋には、再度大阪市立近代美術館準備室のコレクションと当館のコレクションとを対比させて紹介する企画展「中之島コレクションズ」を、当館の特別展「世界制作の方法」と企画展「アンリ・サラ」と同時開催する運びとなり、好評を博した。「大阪コレクションズ」よりも規模は小さかったが、大阪市立近代美術館建設への期待の表れがいかに大きいかをあらためて実感する場となった。

ところで 2013 年春に、実は現在検討中の企画がある。それは、関西の国公立美術館のうち、大阪市立近代美術館建設準備室、京都国立近代美術館、滋賀県立近代美術館、兵庫県立美術館、和歌山県立近代美術館、それに当館を加えた六つ

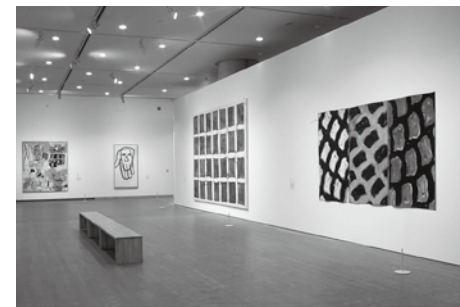
の美術館のコレクションを結集させて、「関西コレクションズ」と銘打ったコレクション展である。

20 世紀から 21 世紀かけての欧米の絵画や彫刻を中心に組み立てる予定だが、欧米中心の美術史観をあらためて見直し、相対化する契機にもなるのではないかと、その内容の吟味に着手し始めたところである。各館が個々に収集している作品が組み合わせることで、作品の魅力は倍加するはずである。

中京地区や北陸地区などでも、コレクションの交換展や合同展がたびたび開催されているし、数年前だったか、全国の公立美術館のコレクションが東京に結集したこともあった。新規の購入が限られる中、こうした試みにも限界はあるが、すでに収蔵している優れた作品が案外知られていないのだという観点から、さまざまなコレクション展が生まれ、来場者を楽しんでもらう機会をさらに増やしたいものである。



「夢の美術館：大阪コレクションズ」会場風景（いずれも国立国際美術館） 2007 年



知恵を絞って

柳沢秀行（大原美術館）



中国ブロックとは言え、島根、鳥取、山口、広島、岡山は、テレビや新聞がカバーするエリアがそれぞれ異なるゆえ情報の往来が少なく、また例えば岡山市から島根県立石見美術館のある益田市まで新幹線に特急を乗り継いでも4時間（東京に着きます）はかかるように各県庁所在地間でも相応の所要時間が必要な地域環境ゆえ、その全域をカバーしての見聞をまとめることはご容赦を。また美術館の活動は企画展覧会だけではなくから、収蔵作品を用いての創意ある展観や、ワークショップなど、主に近隣在住の方を主対象とした（それが本来の活動ですけど）きめの細かい活動を含めた美術館の総合力にはどうしても言い及ばませんので、この点もご容赦を。

と、言い訳がましいことから書き始めたのも、このエリアでの展覧会企画の特徴としては所蔵品や近隣美術館との相互貸借による展示が丁寧に作られたことが挙げられる。

先に名前をあげた島根県立石見美術館では、松江市にある島根県立美術館の所蔵作品も活用し「Mite! ね。しまね」（2月11日～3月26日）などの積極的な取り組みが目立つが、「雲谷派」（2011年11月26日～12月11日）、「森鷗外に愛された画家 宮芳平」（2011年12月8日～2月6日）など地縁の深い動向の継続的な取り上げが実績を上げている。ふくやま美術館では、岡山県立美術館寄託の福武コレクションによる国吉康雄展（1月14日～3月4日）、またその岡山県立美術館では、

常設展示の事業枠ながら質量とも充実した「おかやまアート・コレクション探訪Ⅳ 野崎家コレクション」（2月24日～4月8日）を開催。こうした中でも山口県立美術館はコレクション展の名称で、所蔵作品や地縁の深い作品・作家を取り上げる手厚い展示を積み重ねており、学芸員の腰の据わり具合が頼もしい。

こうした企画が厚みを増すのは、一方で展覧会経費削減が進んでいることを語るわけだが、もっとも、高いお金を出して購入した作品を知恵を絞ってより幅広く活用する方策を考えるのは正しいあり方。またこうした企画は図録が作成されない場合も多いが、研究の蓄積は他にも表現する方法はあるし、資料的価値もあまり高くなく、そのうえ制作原価割れで販売せざるを得ないような図録を作成するよりは良い。

規模の大きな企画展としては、やはり複数館が関わっての巡回企画展が多く、単独館の自主企画展が少ないのもやはり財政状況によるものだろう。その中で目を引いたのが岡山県立美術館「長谷川等伯と雪舟流」（1月20日～2月19日）。岡山ゆかりの画人として雪舟、浦上玉堂、宮本武蔵を柱に充実した水墨画コレクションを築いてきた同館だが、雪舟を基点にした研究の蓄積を活かした好企画で、もちろん作品も見ごたえ十分なものばかりであった。広島市現代美術館での「秋山祐徳太子+しりあがり寿 ブリキの方舟」（2011年10月29日～1月9日）も、異色の組合せのうえ、東日本

大震災以降のしりあがり寿の活動からも注目の集まった展覧会だった。展示のみならずトークなど複数の企画やWEBでの展開なども含めて高い総合点だったと思う。そして現代の動向については、全国美術館会議には未加盟ながらも山口情報芸術センター（YCAM）の相変わらずの飛ばしっぷりからは目が離せない。映像やパフォーマンスアートなど幅広いジャンルで、アーティストと共に次々と新たなクリエイションを世界に向けて発信する施設が、東京や関西のような大都市圏ではない地方にあることは頼もしい。だからこそ、それだけに近隣地域への浸透がとても気になるところだ。

さて美術館を焦点に見てきたが、「広島アートプロジェクト」や「瀬戸内国際芸術祭」といった企画に触発された若手表現者達の動きも途絶えていない。また発表の場こそ中国エリアではなかったが、この地域に拠点を置く太田三郎や小林正人、東島毅などの注目すべき展観も続いた。近在の美術館に在るものが、こうしたアーティスト達の良き伴走者であり批評の目となることを願っている。

せっかくなので大原美術館についてだが、この半期だけでも田窪恭治、斎城卓、松井えり菜、渡辺おさむ、上田暁子といった作家たちが、展覧会や滞在制作で活動を共にした。

最後に、美術館のリスクについて見逃せない動きに触れておきたい。一つは（株）林原の経営問題に関わり、独立した財団法人ではありながら実質的には同社の傘下にあった林原美術館の存続が危ぶまれた件。旧岡山藩主池田家関係など重要作品の流出を危惧する地元有志の署名活動がどれほど影響力を持ったかはわからぬが、結果として会社の再建主体となった長瀬産業も当面は美術館も存続とする意思を示したことでひと山を超えたような様子となった。ただまだ緊張はとけていない。

もう一つは、井原市立田中美術館での小谷元彦作品の一部が盗まれた事件。幸い犯人は検挙され作品も無事返却されたが、日中の展示場からの盗難とその発見の遅れは、日常的な運営状況が抱える問題にとどまらず、それを是正しなかった設置者レベルの問題にまで至るものではないだろうか。



大原美術館 松井えり菜



大原美術館 有隣荘特別公開 田窪恭治

四国四県的美術館動向

松本教仁（高知県立美術館）



地図上から眺めれば四国はひとつの島であり、様々な指標でも四国でひと括りにされる場合が多いのだが、四国山地という巨壁を背骨として回りを瀬戸内海、紀伊水道、太平洋、豊後水道とぐるり海で囲まれた四国四県は、気候風土や県民の気質がそれぞれに異なっており、加えて経済力もまちまちである（残念ながら高知県は最下位）。四国霊場八十八ヶ所巡礼においても、遍路の間では阿波は発心の道場、土佐は修行の道場、伊予は菩提の道場、讃岐は涅槃の道場と四部構成（？）で呼ばれていて、各県の持つ雰囲気や上手く言い表している。

当然、四国四県における文化施設の設置状況や運営の在り方も各々違っている。そのような中、昨年の東日本大震災の影響によって、各県のいずれの美術館も相当な運営の見直しが迫られたことと察するが、震災発生から1年以上が過ぎた現在から昨年度実施された事業を振り返ってみれば、厳しい状況の下、どの館も独自のセンスを発揮し知恵と工夫を凝らした良質な展覧会が数多く開催されているように思える。

美しい会場構成が話題となった高松市美術館の「小谷元彦展—幽体の知覚」や、ほぼ1年をかけてひとりの美術作家の作品世界を掘り下げた丸亀市猪熊弦一郎現代美術館の「杉本博司 アートの起源 科学・建築・歴史・宗教」展4部作。各種イベントに参加してもらうことにより美術の楽しさを体感し、また児童生徒自らが自作の作品を展

示して発信する側にも立つ双方向体験型企画の徳島県立近代美術館「魅力発見！わたしたちの美術館」展。意外なことに国内初の「桂」シリーズ全点の公開となった高知県立美術館「石元泰博の眼一桂、伊勢」展。具体美術協会でも活躍した愛媛県の前衛美術運動のリーダー的存在・坪内晃幸の全貌を明らかにした愛媛県久万高原町の町立久万美術館「坪内晃幸展—追求めた『具体』」等々、字数の都合で紹介しきれないが他にも四国四県の多くの美術館、文化施設において展覧会や普及事業、公演事業等が数々実施されており、厳しい状況においても一定の成果を上げていると思えるのである。

これら各館、各施設の学芸員諸氏のモチベーションの高さには脱帽するしかないのだが、実施された展覧会の傾向として、①新作を中心とした空間体験型展覧会、②綿密な調査研究に基づいた発掘調査型展覧会、③観客参加型のワークショップ的展覧会、④館蔵品を一定の切り口でセレクトしたコレクション展に大別できると思う。この中で近年特に若い観客層から人気を集めているのが①であって、四国に於いては一昨年の「瀬戸内国際芸術祭 2010」の各会場の混雑が未だ記憶に新しいところである。来年の春から2回目の芸術祭が開催されることが内定し、既に準備が始まっているそうであるが、実現すればおそらく大勢の来場者で瀬戸内の島々が賑わうことであろう。

高知県立美術館でも、近年お客様アンケートに

て「もっと現代アートの展覧会を開催してほしい」旨のご要望を多くいただく。高知県内では相応の運営予算と人員体制が施された美術館施設はほぼ当館ぐらいであり、この当館1館が県当局から常々要求されている「県民から寄せられる多種多様なニーズや高い学習意欲に応える運営」を貫徹するとなれば、結局あれもこれもとならざるを得ない。いうなれば幕の内弁当的な年間イベント・スケジュールの構成になってしまうために、専門店の味を求めるカスタマーには物足りなく思われるのだろう。

私が美術館に採用された1990年代前半は現代アート＝難解とされて、回りからは何かと渋い顔をされたものだが、現在では多くの方から「現代アートの展覧会やらないの？」と要望されるぐらいに状況は変化している。あくまで一般論であるが、雑誌やテレビの俎上にあがる現代アート作品＝おしゃれ、ユニーク、キモカワイイというイメージが、一般層の関心を高めているのではないか。

ただ乱暴を承知でいうと、同じ美術館の展覧会でも①と②とは回路が全く違うように思うのだ。①は新しい価値観を提示するアートセンター的企画であり、②は博物館法に則り美術史を編み

作品を守る、従来型のアーカイブ的企画といえるだろう。ひとつの建物施設の中で①と②をそれぞれに尖鋭化するとすれば、収蔵庫を持ち作品および施設の衛生状態を保たねばならない美術館としては、いずれ館内環境保全の問題に突き当たざるを得ない。

また、①の興隆による反動により、従来型のアーカイブ機能を主とした美術館が批判に晒される事例も散見されるが、本来作品を守るという業務は「楽しい」、「楽しくない」といった観客の主観的な価値判断に左右されるべきものではないはずだ。

既に一定の役割分担が進んでいる都市部の美術館の方々にはピンとこないかもしれないが、選択肢が極端に少ない地方においては、細分化する観客のニーズや、ますます高度な知識とスキル、機能設備が求められるIPMに対応するには、現在の美術館機能を分割しアートセンター部門を独立させるか、もしくはさらに現行の機能を拡充し施設の大型化を図らねばならないように思う。

いずれにしても膨大なコストが伴うことであり、地方美術館の運営は今後ますます大変だとひとり溜息を吐くばかりである。



故・石元泰博氏（写真家、文化功労者）の高知県立美術館における最後のお姿。「石元泰博の眼一桂、伊勢」展の最終日に急遽東京よりご来場された。

美術館の原点へ／拡張する美術館へ —九州の活動から—

坂本顕子（熊本市現代美術館）



2011 年度後半に九州で開催され、印象に残った企画として、福岡県立美術館の「糸の先へ いのちを紡ぐ手、布に染まる世界」、福岡市美術館の「第10回 21 世紀の作家—福岡 鈴木淳展 なにもない、ということもない」をあげたい。

「糸の先へ」展は、同館の竹口浩司氏の企画で、人間国宝の志村ふくみから、鹿児島市の障がい者支援施設「しょうぶ学園」のヌイ・プロジェクトまで、10 組の染色工芸・ファイバーワークを紹介したものである。伝統的な織、染の名品から、籠、刺繍、インスタレーション的な作品まで、作家選定も 10 組中 5 組が九州・沖縄の作家と、非常にバランスのとれた選択であった。ポスターを兼ねたチラシ、カタログ、会場構成も、やや固いイメージのある工芸展示をゆるやかに広げていく新鮮さがあり、若い層にも訴えかける魅力を含んでいた。また、会場内スタッフが気軽に質問に応じる体制を整え、過去の企画においても積極的にハンズオンを設けるなど、美術館企画としての質を保持しながら、丁寧な受け手やファンを育てていくという工夫や愛情を感じさせる内容であった。

「鈴木淳」展は、1995 年以降、ビデオやインスタレーションによる圧倒的な量の作品を発表する一方で、雲をつかむようにその実像が捉えきれていなかった、鈴木淳という作家を徹底的に解剖した、山本香瑞子氏（現静岡市美術館）の労作である。同時開催中の「レオナルド・ダ・ヴィンチ 美の理想」展を横目に、展示室には工事現場の足場が組

まれ、天井に花輪、吊り下げられ回転する女性用ウィッグ、倒れたまま回り続ける扇風機が設えられ、その合間に、初期から最新作までの無数のビデオ作品がループ上映される。カタログはこれまで系統だてられていなかった膨大な作品資料を整理し、九つのチャプターにわけ、分析されていた。同展は、「明日への造形—九州」（1981～87 年、全 7 回）に続く、「21 世紀の作家」（1999 年～）のシリーズで、地域で活躍する現代美術作家を紹介するものである。作家の層の薄い九州で続けられてきた、この福岡市美の試みは、地域の作家や作品とどう向き合い、全国や世界のシーンへと作家を押し上げていくかという問題に対するひとつの解答を示している。

さて、筆者が活動する熊本はどうか。今年、熊本市現代美術館は開館 10 周年を迎え、最も大きな転機を迎えている。もちろん、これまでも、いくつかの転機はあった。開館後間もない 2006 年に導入された指定管理者制度は、学芸員や美術館の在り方を 180 度、根本から考え直させるものであったし、現在修復作業が進んでいる 2009 年の絵金作品の変色事故は、自分たちの未熟さを猛省し、新たな研鑽を厳しく積む機会となった。それをきっかけに、作品を適切に保存管理し、未来へ繋げるという美術館の基本的な原点に立ち返り、東京文化財研究所、九州国立博物館等に指導を仰ぎながら、IPM 技術の修得や、九州地域的美術館・博物館との情報の交換や共有、研修に取り組んでいる。

IPM が美術館の原点に立ち返る活動だとすると、その一方で、美術館の可能性を広げ、その意味を拡張させていく事業も始まっている。本誌第 1 号で、福岡市美術館の山口洋三氏が、「面的情報発信は可能か？—連携進む九州の美術館」と取り上げられた通り、2011 年には熊本県立美術館、坂本善三美術館、宇城市不知火美術館、つなぎ美術館と当館の 5 館で、熊本ゆかりの画家、坂本善三の生誕 100 年を記念した連携展を実施した。熊本県美、当館以外の 3 館は、いずれも学芸員 1 名の小規模館である。山口氏も述べていた通り、地域という「面」として、作品を守り、研究や情報を共有していくことの重要性を、とりわけ小規模館の学芸諸氏が強く感じられていることを、身を持って知る機会となった。この連携がひとつのきっかけとなって、「グレーの画家」と呼ばれた坂本善三から名前を頂いた研究会、「グレーの会」を展覧会担当学芸員が立ちあげた。小さくはあるが、地

域の美術館ネットワークを活用していくために、一歩前進したところである。

また、もう 1 点、積極的に推進しているのが、地域の商店街やアート NPO、音楽や演劇などのグループとの連携である。熊本の中心商店街アーケードの中心に位置する当館は、美術館であると同時に、商店街をはじめとする地元コミュニティの重要な構成員でもある。九州新幹線が開業 1 年を迎え、また熊本市が政令指定都市となった本年、中心市街地の文化のハブ、拠点としての役割が、市民からも行政からもより強く求められるようになっていく。例えば、地域の祭りがあれば、積極的にワークショップコーナーを出張開店し、地域のアート NPO に対しても、作品審査や講評をはじめ、協働で事業を展開し、気軽に運営の相談にのって活動を後押しする。そういった街の文化施策に深く関わる活動が、次の 10 年に向け、今、はじまったばかりである。



福岡県立美術館「糸の先へ いのちを紡ぐ手、布に染まる世界」会場風景



鈴木淳《それでも、世界は、まわっている》（部分）2011
撮影：山崎信一（スタジオパッション）

no. 1

一関市博物館

〒 021-0101 岩手県一関市巖美町字沖野々 215 番地 1



TEL: 0191-29-3180
FAX: 0191-33-4006
E-mail: hakubutsukan@city.ichinoseki.iwate.jp

【開館時間】
午前 9 時から午後 5 時まで（入館は午後 4 時 30 分まで）

【休館日】
月曜日（祝日の場合その翌日）、年末年始、資料整理のための休館（12 月に約 10 日間の予定）

【開館時期】
1997 年 10 月 10 日

当館は、地域の歴史と特色ある文化を取り上げる市立の人文系博物館として 1997 年に開館した。JR 一関駅の西方約 9km に立地し、国の名勝及び天然記念物に指定されている「巖美溪」まで徒歩約 8 分の至近距離にある。また、2011 年にユネスコの世界遺産に登録された平泉の文化遺産である中尊寺や毛越寺等にも程近い。

常設展示室は歴史分野の 5 室で、通史展示のほか、一関に関わるテーマ展示の 4 室から成る。日本刀の成立と発展に関わる舞草鍛冶等について紹介する「舞草刀と刀剣」、蘭学者 大槻玄沢及び日本初の国語辞書『言海』の編纂者である大槻文彦に関する「玄沢と蘭学」「文彦と言海」、当地で盛んであった、江戸時代に発達した数学「一関と和算」の各室である。年間 4 回程度開催している企画展示については約 200㎡の企画展示室を用い、時には館内ロビーやホール、常設展示室も使って臨機に開催している。現在のところ美術館を有しない一関市においては、このうちの 1 回を美術展覧会に充てている。

収蔵作品は歴史資料、考古資料の他に、国重要美術品《刀 額銘 建武宝寿》、狩野常信《吉野龍田図屏風》、川原慶賀《長崎港図》といった古美術、地域ゆかりの作家である佐藤紫煙、福井良之助、森本仁平、白石隆一などの作品がある。

近年特に力を入れているのは、佐藤紫煙の研究である。紫煙は明治時代半ばから昭和 10 年代にかけて活躍した旧派の日本画家で、往事は実力有る人気画家であったとされるが代表作と呼べる作品も画歴の裏付けとなる文献も乏しく、本格的な研究がなされてこなかった。そのため長らく「忘れられた画家」となっていたのだが、2006 年に紫煙のご遺族・ご子孫によって数千点に及ぶ大下図や模写等の関係資料が寄贈され、調査を開始した。2008 年には代表作とも言える作品の現存が新潟市で確認され、2010 年には企画展を開催、現在も調査を継続中である。今後各地で旧派の日本画家やその作品が再発見され、研究が進展することであろうが、紫煙研究もその一助となることを願っている。

当館では教育普及活動（交流連携活動と呼称している）にかなりの力を入れていると自負している。展覧会時の展示解説、ギャラリートークはもちろんのこと、展覧会や常設展示内容に関するシンポジウムや講演会、茶話会、体験学習プログラムを各種企画し、その多くは外部講師を招聘することなく館長及び 4 名の学芸員を中心として館職員が行っている。地道な活動ではあるが、参加者の反応を肌で感じることができ、また、調査研究の成果を直にお伝えすることのできる機会ともなるため、回を重ねる毎内容の充実を図るよう心がけている。（大衡彩織）

no. 2

新潟市新津美術館

〒 956-0846 新潟県新潟市秋葉区蒲ヶ沢 109 番地 1



TEL: 0250-25-1300
FAX: 0250-25-1303
E-mail: museum.ni@city.niigata.lg.jp

【開館時間】
午前 10 時から午後 5 時まで（入館は午後 4 時 30 分まで）

【休館日】
月曜日（祝日の場合はその翌日）、年末年始、展覧会準備期間

【開館時期】 1997 年 10 月 1 日

新潟市新津美術館は、1997 年 10 月 1 日に新潟市美術館として開館した。当時の新潟市が主体となって設立した財団法人が管理運営を市から受託し、2005 年の新潟市との合併を経て 2006 年からは市の直営となっている。

新潟市の市街地から約 15km の南東部にある丘陵地に位置し、新潟県立植物園や国指定史跡とともに「花と遺跡のふるさと公園」を形成している。4,500㎡ほどの床面積の中に 450㎡の展示室が 2 室あり、貸出用の市民ギャラリーのほか野外劇場も備えている。

ロビーには大理石でできた階段状のアトリウムがあり、館のシンボルとなっている。このアトリウムでは、インスタレーションによる展示のほか、音響効果を生かしたミュージアム・コンサート、文学と音楽を融合した「シーズン・アンド・アート」など個性的なイベントを開催している。

展覧会では、開館当初から企画展示を中心に運営し、近現代の日本画や洋画のほか現代美術の大竹伸朗展や、岡本太郎展、キース・ヘリング展などを行ってきた。また、全国有数の花の産地であることから縁が生まれた秋山庄太郎などの写真展や、絵本原画の展覧会、漫画・アニメーションなどのサブカルチャー展も数多く開催している。

2010 年から、地元出身の洋画家・笹岡了一の収蔵品を中心とした常設展を開始するとともに、公共施設などにある美術品の展示に向けた調査・研究を積極的に行い、地域における芸術・文化の情報発信機能の充実を目指している。

本年 4 月に、開館 15 周年を記念して「ウルトラマン創世紀展」を開催した。この展覧会は、円谷プロダクションなどの協力を得ながら新津美術館で企画・構成したもので、今後各地での開催が期待される。

入館者へのサービスとして、子どもを連れたお客様から気軽に鑑賞していただくためのサービスを、2008 年から行っている。一つは、2 週間に 1 回程度、BGM を流しながら親子などで鑑賞中に会話を楽しんでもいただける「こどもタイム」で、もう一つは大人がゆっくり鑑賞できる無料の「託児サービス」である。託児サービスは、生後 6 カ月から就学前までの子どもを対象に、展覧会期間中の 5 日ほど、事前に申し込みを受けて有償ボランティアサークルが実施している。このサービスは、美術館が主催するコンサートや展覧会関連イベントの開催時にも行っている。今後も利用しやすいサービスを提供し、入館者に親しまれ、愛される美術館を目指していきたい。（小林 巧）

海に見える杜美術館

〒 739-0481 広島県廿日市市大野亀ヶ岡 701 番地



TEL: 0829-56-3221
FAX: 0829-56-0661
E-mail: info@umam.jp

[開館時間]
午前 10 時から午後 6 時まで 12 月～2 月は午後 5 時まで
毎週金・土曜日は 2 時間延長

[休館日]
不定休

[開館時期] 2005 年 9 月 16 日

世界遺産の島・宮島を一望する山の中腹に建つ海に見える杜美術館は、1981 年 11 月、創設者・梅本禮暉により、「優れた美術品は人類の宝であり、個人が私蔵とするのではなく、広く公開されるべきものである。ゆえに美術品の所有者は、後世の人々の為にも、その研究と保存に力を尽くさなければならぬ。」という理念のもと、創設者のコレクションを軸に「王舎城美術寶物館」として開館した。その後もコレクションの充実を図りながら、展覧会を通して所蔵作品の展示公開を行ってきた。そして、2005 年には、名称を「海に見える杜美術館」と改め、自然との触れ合い、自然との対話ができる癒し空間の美術館をコンセプトにリニューアルオープンし、現在は館蔵品展・企画展をあわせ年間で 4～6 回の展覧会を開催している。

当館のコレクションの概要は、竹内栖鳳を中心とした近代日本画 300 点、江戸時代前期に制作された豪華な《村松物語絵巻》に代表される奈良絵本絵巻などの物語絵 50 点、初代歌川広重の花鳥画や奥村政信、鈴木春信、喜多川歌麿などの浮世絵 400 点、天皇や皇族、武家、茶人などの書 150 点、日本の浮世絵に影響を与えたとされる世界的にも貴重な

清代の蘇州版画に代表される中国版画 200 点、古代から現代にいたる香水瓶 300 点など多岐にわたる。なかでも竹内栖鳳の作品群では、代表作のひとつ《羅馬之図》をはじめとする 120 点を所蔵し、若年のころから晩年まで作風の変遷を辿ることができる。

さらに、栖鳳の師匠や弟子たちの作品、遺族旧蔵の資料なども所蔵しており、多角的に栖鳳の画業を展望できる。そして、美術品のみならず明治政府の最高指導者の一人である岩倉具視に宛てた西郷隆盛や伊藤博文らの千数百点の書簡・意見書などがまとめられた《岩倉具視関係史料》なども所蔵している。

また、来館者の方々に作品の鑑賞をしていただくだけではなく、美術館周辺の豊かな自然環境と景観を楽しんでいただけるよう、駐車場から美術館までのプロムナード「杜の遊歩道」を整備し、さらに食文化も楽しんでいただけるようフレンチレストラン「セイホウ・オンブラージュ」を遊歩道内に併設し、五感を通して文化や芸術を体験できる空間を整えている。

今後もご来館のみなさまに日常の喧騒から離れて、癒しの場所として心から和んでいただけるような美術館を目指し歩んでいきたい。(森 議弘)

東日本大震災復興対策委員会の活動について

全美は昨年3月の東日本大震災発生から、会員館の被災状況の情報収集と公開、文化財レスキュー事業への参加、救援・支援活動募金の設置、チャリティ・オークションの開催など、さまざまな取り組みを行ってきました。ここでは、昨年11月に設置された「東日本大震災復興対策委員会」の活動についてご紹介します。

この委員会は、被災地の美術館に対する支援と、震災から派生した諸問題への対応を、全美の組織をあげて重点的に行うために設置されました。全美の救援・支援活動の資金は、募金・寄付金とチャリティ・オークションの収益をあわせて147,120,087円（平成24年3月末現在）に達しており、これを財源とする復興支援事業の企画立案を行うことが委員会の役割です。会員館から寄せられる事業案は、この委員会で審議され、採択された事業は理事会の承認を経て、提案館または対策本部により実施されます。

復興対策委員会は、被災地会員館の代表と、全美理事およびブロック本部館の館長、計11名で構成され、山梨俊夫理事が委員長を務めています。昨年11月以降、同委員会と対策本部の合同による3回の会合が開かれました。これまでに実施が決定した事業は、放射線測定器の購入（福島県立美術館はじめ4館）、復興企画展の実施（岩手県立美術館、萬鉄五郎記念美術館ほか）、館の再開に向けた展示資料等の整備（リアス・アーク美術館）、レスキュー事業の対象となった石巻文化センター所蔵作品の展示公開（宮城県美術館）、陸前高田被災資料デジタル化プロジェクト（東京都写真美術館）など、13件にのぼります。

被災地の美術館活動に対する支援は、これからも長期にわたる取り組みが必要です。事務局では引き続き、事業案を随時募集しています。東北・北関東の館に限らず、被災地の外からも、美術館同士の連携による復興支援のための積極的な提案を歓迎します。

平成24年度第1回理事会および第61回総会について

5月28・29日、徳島県鳴門市の大塚国際美術館を担当館として開催された、平成24年度第1回理事会および第61回総会についてご報告します。

28日午前に開かれた理事会では、新規入会の申込み、役員の交代、23年度事業・収支決算、24年度事業計画案・

収支予算案が審議されました。続いて、東日本大震災復興対策委員会による報告と審議が行われ、新たに支援事業3件の実施が決定しました。また、学芸員によるギャラリートークを映像に記録しインターネットで配信する「CURATORS TV」プロジェクトについて、大阪市立大学の鈴木大輔氏から説明を受けました。

同日午後の総会は大塚国際美術館のシスティーナ・ホールで、会員館129館の出席により開催されました。徳島県知事および鳴門市長の歓迎挨拶、文化庁長官の祝辞の後、議事に入り、午前中の理事会の検討を経た議案4件がいずれも承認されました。一関市博物館、海の見える杜美術館、新潟市新津美術館の3館が新たに入会し、5月末現在の会員館数は362館となっています。また、奥岡茂雄理事、酒井哲朗理事の退任に伴い、札幌芸術の森美術館の佐藤友哉館長、福島県立美術館の早川博明館長が理事に就任されました。

報告の部では、はじめに企画委員会の活動報告があり、各研究部会から昨年度の活動と今年度の計画について発表が行われました。昨年度は研究部会の多くが震災に関連した活動を行っています。また、機関誌部会の編集による『ZENBI』の創刊も特筆すべき実績でした。次に、東日本大震災復興対策委員会から報告が行われ、続いて事務局から、この一年の全美による救援・支援活動を報告しました。このほか、昨年新設された美術館政府補償制度の実施状況、美術著作権の新管理団体の設立、さらに、節電が求められる中で美術館の環境管理に関する検討状況について、それぞれ報告がありました。いずれも引き続き調査・検討が求められる問題です。

総会に続く特別セッション「文化財レスキュー事業の経過とこれから」は、被災文化財等救援委員会の岡田健事務局長（東京文化財研究所）、宮城県教育庁文化財保護課の小谷竜介技術主査、陸前高田市立博物館の本多文人館長、東北芸術工科大学の藤原徹教授をお招きして、全美対策本部の3名を加え、文化財レスキュー事業の経過報告とともに、今後の課題を考えることを狙いとしていました。残念ながら議論を深めるには時間が足りませんでしたが、今回の活動の経験をふまえ、より有効な災害対応の体制を作るための検討を全美の中で引き続き行うことが必要です。

総会2日目の5月29日は、担当館をお願いした大塚国際美術館の見学を行い、学芸員の方々によるギャラリートークとともに、西洋美術の歴史を網羅する壮大な再現展示を堪能しました。総会の準備と実施にご尽力いただいた大塚国際美術館の皆様には、あらためてお礼申し上げます。また、第62回総会は宇都宮美術館及び栃木県立美術館を担当館として、来年5月30・31日に宇都宮市で開催されます。年に一度の総会が有意義なものとなるよう、次回も多くの会員館の参加をお願いします。

ZENBI 全国美術館会議機関誌 投稿規定

1. 全般事項

- (1) 本誌への投稿者は原則として全国美術館会議会員館職員に限る。
- (2) 投稿原稿は他誌（電子媒体を含む）に発表されていないものに限る。
- (3) 原稿（写真を含む）は原則として電子メールで提出すること。
- (4) 原稿は原則として 2,000 字程度とする。

2. 投稿文の採否

- (1) 投稿文の採否、掲載順などは全国美術館会議機関誌部会（以下「部会」という。）に一任とする。
- (2) 掲載が決定した場合は、その旨を投稿者に通知する。

3. 原稿について

- (1) 原稿は原則として常用漢字を用いることとし、である調とすること。
- (2) 引用した文献は、本文中において該当箇所の右肩に順次番号をつけ、その番号を引用順に列挙すること。

- (3) 個人を同定しうる顔写真等を掲載する場合は、本人等の承諾を必ず得ること。
- (4) 投稿文にはできる限り画像の掲載をお願いするが、著作権許諾及び著作権料の支払いが必要な場合は投稿者が責任を持って処理すること。

4. 校正について

校正については、初校をもって著者校正とする。その後は部会の責任とする。

5. 著作権について

- (1) 本誌に掲載された投稿文の著作権は全国美術館会議に帰属するものとする。
- (2) 掲載後の投稿文について著者自身が活用するのは自由とする。ただし、出典（掲載誌名、巻号ページ、出版年）を記載するのが望ましい。

6. その他

- (1) 原稿料は支払わない。
- (2) 掲載投稿一編につき、本誌 5 部を進呈する。

編集後記

『ZENBI』の第 2 号をお届けする。年に二回の発行を予定しており、本誌は 2012 年度の上半期号となる。時事的な話題を掲載するには発行の間隔が長く、年間の活動を報告するうえではやや頻繁な発行であるが、編集の態勢やシステムが整ってきたこともあり、今後もこのペースで発行を続けたい。

昨年震災の余波はまだ続いている。一方で美術品国家補償制度が成立し、実際に展覧会へ適用されるといった明るい話題も伝えられた。また美術館倫理規程の問題についてはその必要性も含めて現在、運営制度研究部会を中心に議論が進められている。今回のフォーラムに寄せられた文章からは期せずして今日の日本の美術館をめぐる様々な状況が浮かび上がってくるように感

じられる。いずれの問題も今後も継続的に対策が講じられ、議論が深められるべき余地を残している。ひとまず問題の輪郭を知るうえで本誌が加盟館の職員にとって一助となれば幸いである。

美術品の貸出に関して原子力災害による風評被害のニュースを聞く。本誌が発行される頃、電気の使用量は最大となっているはずだ。公的機関の中でも格段に大量の電力を消費する施設として、単に節電を唱えるだけでなく発電という問題といかに関わるか、私たちが真剣に考えるべき時を迎えているのではないだろうか。

少しずつ投稿も集まり始めたが、まだ次号に持ち越すほどではない。原稿が増えれば議論も深まるはずだ。引き続き多くの方からの投稿をお待ちしている。

(O)

『ZENBI』では、
次の要領で広く皆さんからの
原稿をお待ちしています。

〔原稿の内容〕

- ・展覧会、普及活動など美術館の活動に対する批評を受けつけます。
- ・原則として具体的に対象を限定した批評をお寄せください。
- ・原稿には表題を付してください。

〔投稿の資格〕

- ・全国美術館会議に所属する美術館博物館の職員であればどなたでも投稿できます。
- ・匿名の投稿は受けつけません。

〔投稿に係る詳細〕

- ・原稿の形式、許諾、著作権等については投稿規定を参照ください。

〔締切〕

- ・第 3 号（平成 25 年 1 月発行予定）に関しては 10 月 31 日、第 4 号（平成 25 年 7 月発行予定）については 4 月 30 日を締切とします。（当日必着）

〔提出先〕

メールの場合

matuyama@ma7.momak.go.jp

郵送の場合

606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町
京都国立近代美術館内
全国美術館会議機関誌部会
幹事 松山利光

〔問い合わせ先〕

内容に関する問い合わせは下記に御連絡ください
680-0011 鳥取市東町 2-124 鳥取県立博物館内
全国美術館会議機関誌部会
幹事 尾崎信一郎
E mail: s-osaki@pref.tottori.jp